病院図書室司書の雇用についての実態調査

荒木亜紀子[1)] 山本悦子[2)]
[1)] 川崎市立井田病院　[2)] 横浜市総合リハビリテーションセンター

1.目的

病院図書室は、最新かつ正しい情報に基づいた信頼・安心できる医療を提供する上で重要な役割を果たすものであり、それを維持管理しより効果的に利用できるようにするためには「病院図書室司書」という専門職を置く（育てる）ことが不可欠である。

近年は、病院機能評価や卒後臨床研修評価などの受審によって職員教育の一機関としても病院図書室が重要視されているのは明白だが、それは“必須”とはいえず、たとえ図書室や司書を置いても形式的の場合もある。さらに、病院図書室はそのほとんどがワンパーソンライブラリーで、司書は病院図書室に関わるすべての業務を 1 人でこなしているのが現状である。

また、病院図書室司書は非正規職員としての雇用形態が大半だが、待遇の悪さから安心して仕事が続けられない、専門職として育ちにくいという問題が生じるとともに、施設としては質の高い図書室サービスを安定して維持することが困難になることが考えられ、それは医療従事者の学習・研究や臨床の成果にも影響することも考えられる。

2.方法

今回、病院図書室司書にアンケート調査を行い、その実際の待遇と仕事や生活の満足度、将来の展望などについて質問した。アンケートは東京近郊の病院図書室司書 40 名にインターネットで呼びかけ、回答をメール添付で送付してもらった。回答数は 17 名で、回答率は 42.5%だった。雇用形態の内訳は正規職員が 7 名、非正規職員が 10 名であった。

3.結果

アンケートの結果、正規職員、非正規職員司書の待遇においては歴然とした差が認められたが、業務内容は正規職員、非正規職員でほぼ差がなかった。一方で非正規職員司書は図書室専任が多いが、正規職員司書には図書室以外の仕事を優先せざるを得ない状況や部署異動の可能性もあり、施設の一職員という位置づけの中で「病院図書室司書」という専門職を安定して向上させることが必ずしもできるわけではない、という現状も浮かび上がってきた。こうした背景には「医療現場では最新かつ正しい情報をいつでも得られる環境が必須であり、それには図書室や専門の司書を整備することが望ましい」という意識が、まだ十分に行きわたっておらず、雇用側の施設ごとに意識の格差があるといえ、そうしたことが病院図書室司書の雇用形態の格差や病院内での位置づけの不安定さの原因となっているのではないかと考えた。

4.結論と今後の展望

上記の問題を解決するには、ただやみくもに非正規雇用を正規雇用にすることが到達点ではなく、すべての医療従事者に最新で正しい医療情報を入手できる環境を整備することの重要性を浸透させ、それぞれの施設に見合った規模や内容の図書室または医療情報入手方法を施設側が選べるような基準の確立が必要だと考えるに至った。そうしたことで、病院図書室司書の必要性と専門性がより重視され、施設側では医療情報入手環境の整備の必要性を理解したうえで、その求めるレベルに応じた対価を安心して投じることができるようになり、それは司書の雇用の安定や施設内での理解を得られることにつながり、ひいては医療従事者の情報入手環境向上と医療の質の向上にもつながっていくのではないかと考えるに至った。